

資料

西陣木村卯兵衛家の奉公人

仲村研

まえがき

西陣木村卯兵衛家の奉公人

ここに紹介する史料は、京都市上京区大宮通元誓願寺下ルの木村卯兵衛株式会社代表取締役木村卯兵衛（八代目）氏の所蔵になるものである。木村卯兵衛家は篠（笹）屋の屋号で呼ばれる西陣の繊維製品卸売業の老舗で、史料の上限の時点は宝暦年間から下限は昭和初年におよんでいる。同志社大学人文科学研究所は昭和四八年にこの史料の目録を刊行した。その内訳は家政関係七〇点、経営関係二六四点、仕入請状一七点、奉公人・暖簾分け関係二二九点、町関係二五二点、雑史料一二八点、書簡二八点の計九八八点と篠屋の所在する北之御門町の町有文

書八一点である。

ここではそのうち、奉公人・暖簾分け関係史料を中心に六〇点余を紹介する。意図するところは、篠屋における主人と奉公人との関係の具体的なあり方、とくに奉公人の篠屋にたいする「家」意識の問題について、少しでもこれらの問題に接近することの一助にもなればということにある。

篠屋については、すでに昭和四五年に京都府商工部から刊行された『老舗と家訓』の中に、足立政男氏が家訓、家憲の類を紹介されている。また安岡重明氏も昭和四八年に刊行された『京都の歴史』第六巻の第三章「伝統産業の成立」第二節「西陣の盛衰」で上仲買仲間のひ

とつである篠屋の、宝暦七年から弘化四年にいたる一〇年間の経営の動態を「本帳」によって詳細に分析されている。私は約千点の史料の残存のあり方から推して、篠屋にとっては寛政年間から天保年間にかけての五、六〇年が変動の激しい時期ではなかったかと考えている。

篠屋の奉公人関係史料の中で重要な位置を占めるものは、元治元年から昭和一六年まで連続と書き続けられた『奉公人召抱控』であろう。六代目木村卯兵衛常泰から始まったこの帳簿は、昭和に入ると奉公人の簡単な履歴書の紙片が挟んでいるという状態になっているが、それにしても幕末以降の篠屋の奉公人のほとんどの動態が判明するであろう。足立政男氏も『老舗と家訓』に『奉公人召抱控』の一部を紹介されているが、私も重複を避けて、別家開業する奉公人についてのみ該当箇所を紹介しておいた。『奉公人召抱控』には弘化四年から昭和一六年の雇入れまで約二五〇人の男女の奉公人について出身地、親父名、宗旨、生年月日、雇入年月日、世話人名、

雇入れ以後の経過などが簡単に記入されており、今後この帳簿のより詳細な分析が期待される。

ここで注目すべきは、別家を許可されたときの奉公人の主家に入れた誓書である。ここには奉公人の主家にたいする感情と「家」意識があますところなく吐露されている。この文面は明治、大正、昭和初年においても変化していないが、しかし徐々に奉公人の意識は変化しつつあるように思える。それは五五〇五八号史料の七代目木村卯兵衛宛の奉公人の上申書で示されている。この上申書は直接店主へ提出されているのではなく、商業興信所京都支所を経由して提出されているものである。事件は当主八代目が室町の問屋での奉公を終えて帰店してのち、店員と商業方針で対立したことを契機として惹起したものである。この事件の中に、奉公人の主家にたいする意識の変化が読みとれるであろう。

木村卯兵衛家の家訓については、明治二年八月の永代相続人定書、明治一一年二月の家法定書があり、六代目

時代の経営方針がよくわかるが、この両定書については『老舗と家訓』に紹介されているので、ここでは明治一年三月の『先祖ヨリ由緒書』と明治三〇年、大正一〇年頃、昭和一二年の店則とを紹介しておきたい。なお、ここに紹介する史料は『老舗と家訓』の史料との重複を避けたが、若干のものが重複していることを断っておきたい。

最後に本史料整理の契機をつくっていただいた故渤海茂一氏と、所蔵者の木村卯兵衛氏に深謝する次第である。

一 奉公人懐胎ニ付請状一札(D 1)

一札之夏

一其元殿ニ御奉公相勤メ居付申候年季之弟子およそ義、私不埒仕、年季之内ニ懐胎致させ奉公之御間かゝせ申候而、御立服之段御尤ニ奉存候、然ル處御了簡被成下、養生中私シ方江御預ケ被下候様御頼ミ申上候所、御聞

届ケ被成下、(森本屋加兵衛ノ印アリ) 千万忝奉存候、然ル上者、私シ方ニ而大切ニ養生致させ安産致させ可申候、出産仕候ハ、早速御返し申、極メ之年季急度相勤させ、御奉公之御間少茂かゝせ申間敷候、万一人不埒仕候ハ、証人罷出(丸屋善兵衛ノ印アリ) 急度埒明、其元殿へ少も御奉公之御間かゝせ申間敷(丸屋善兵衛ノ印アリ) 候、為後日之一札、仍而如件、

安永九年子七月

清水四丁目

森本屋 加兵衛 ㊦

古門前石橋町

丸屋 善兵衛 ㊦

井筒屋

仁兵衛殿

二 松之助別宅ニ付賜物請証覚(D 2)

覚

一本定図并小道具付 巻組
一広紋紗箆機 但しいわ竹添 巻機分

一立糸 曾代 三百目

一貫糸 結糸 三百目

一金子 三兩也

一白米 五斗

右合六点

此度、私 義 御相對之上ニ付別宅致候也、其義ニ付、右六品御渡し被下候段、千万忝申請候処実正也、然ル上者此末如何様之義御座候共、無心掛リケ間敷義少しも申間敷候、為後証一札、仍而如件、

寛政四年 壬子 正月

本人 松之助 (花押)
証人 井筒屋 弥七 ㊤

母 おふさ殿

一家中 参ル

一私着類不殘御渡し被下慥ニ請取申候、以上、

松之助 (花押)

三 大文字屋清藏、奉公人まさ請狀 (D 4)

奉公人請狀之事

一此まさと申仁、去ル亥ノ七月、來ル酉ノ七月迄九年拾年限、貴殿方へ奉公ニ遣申候所実正也、此仁淵底能存慥成仁ニ而御座候故、我等請人ニ罷立申候、尤御法度之宗門ニ而も無御座候、年季之内勝手ヲ申立、理不盡之障を乞申間鋪候、定之内不奉公仕候敷、又者取逃欠落其外如何様之惡事出来仕候共、我等罷出急度埒明相勤申候、内之仕着 セ 飯料共急度相立可申候、其時一言之異儀申間敷候間、如何共御家之御作法之通ニ可被成候、勿論糸道之奉公者被致申間敷候、為後日之奉公人請狀、仍而如件、

寛政四年 壬子 四月

西洞院九太町上ル町
請人 大文字屋清藏 ㊤
親 ゆき ㊤

奉公人 まさ

井筒屋お房殿

四 とわ、子供奉公人ニ出スニ付一札写(D 6)

一札

一私シ夫伊兵衛義、当六月十九日相果、跡相統難成候ニ付、其御元殿へ相頼申上候処、御聞届ケ被下、御了簡お以御助ケ被下、娘たミ、忤石松二人、其御元殿へ御引取被成被下、忤仕合奉存候、勿論二人共一生不通致遣シ申上候間、如何様共宜敷御取計可被成候、少茂申分無御座候、并私シ懷妊致居候者、当九月十四日安産致男子ニ而御座候、是ニ付御憐愍被成下、片付代として銀子壹枚半、此銀六拾四匁五分御渡シ被下、重々難有奉存候、右之趣御取計被下候上へ、此以後私シ残り候子供身分ニ付、其御元殿へ無心掛リケ間敷義一切申間敷、若我等も申出候ハ、此一札お以御申披被成可被下候、其時一言子細申間敷候、為後日之一札、仍而如件、

寛政四年

壬子九月十八日

坂本高島
本人 と わ

今出川寺町西へ入二丁め
証人 金 蔵

坂本屋正順殿

井筒屋お房殿

御一家中へ

五 卯八、奉公人いそ請状(D 8)

奉公人請状之事

一此いそと申女、其元殿へ寅正月も七月迄半年限給銀五拾匁相定奉公致させ申処実正也、我等請人相立申候、一御公儀様御法度之義不及申、御家作法被相守申候、其外何ケ様義仕出シ候共、我等罷出引取埒明、其元殿へ少茂御難掛申間敷候、勿論幾年御遣イ被成被下候共、此請状お以、我等請負可申候、為後日之請状、仍而如件、

寛政七年

卯正月

上島羽村
親 鳥羽屋儀兵衛印

同所

請人 卯八

奉公人 いそ

井筒屋

おふさ殿

一 私娘いそ義ニ付金子要用ニ付、去ル子年迄ニ金子三步より請候得共、御了簡お以其俣御捨置被下、重々忝奉存候、然ル上ハ此後無心ケ間敷義一切間敷候、為其一札如件、

儀兵衛
証人 卯 八

六 近江屋佐兵衛織手請狀 (D 11)

織手請狀之支

一 此佐兵衛与申仁、当辰ノ九月来ル巳三月迄貴殿宅へ織手奉公ニ進シ申候所実正也、(近江屋喜介ノ印アリ)為前借シ与金子老両借(近江屋喜介ノ印アリ)用仕、唯今慥ニ請取申候也、此仁我等能存慥成仁ニ而御座候故請人ニ罷立申候、定之内理不尽ニ隙ヲ乞申間敷候、
(近江屋喜介ノ印アリ)
御家之御勝手ニ入申候様御召遣ひ可被下候、亦者取逃欠落其外如何様之惡事出来仕候共、我等罷出急度埒明、貴殿江少シ茂御難儀掛申間鋪候、幾季相動申候共、

貴殿方ニ居申候内者、此印形ヲ以テ、我等請人ニ相立居申候、為後日之織手請狀、仍而如件、

寛政八年丙辰九月

請人 近江屋 喜 介
奉公主 近江屋 佐兵衛
井筒屋お房殿

注 近江屋喜介、同佐兵衛ノ印ハ同一ノ印判ト認メラレル。

七 丹波屋五兵衛、奉公人よし請狀 (D 19)

乳奉公人請狀之事

一 此よしと申者、当酉三月来戌ノ三月まで御乳ふくも奉公老ケ年極ニ而申処実正也、生国者丹州桑田郡中村百性清七娘ニ而、我等能存知、夫とも無御座候、慥成者ニ候故、我等請人相立申候、則給銀四枚ニ相決、右之内式枚、此度請取申処実正也、(檜皮屋嘉七ノ印アリ)然ル處来戌年三月残り銀受取申候、相違無御座候、
一 御公儀様御法度之切支丹宗旨ニ而も無御座候、宗旨ハ

禪宗ニ而同村光明寺旦那御座候、則寺請狀我等方ニ
取置申候、万一乳あがり候ハ、早速代り立可申候、
若無之候ハ、給銀日算用ニ仕、急度相立可申候、御
奉公之内取込欠落之外、何事ニよらず不奉公仕候ハ、
請人罷出埒明、少し茂御難掛ケ申間敷候、我等請人ニ
相立候上者、御氣ニ入何年ニ而も御遣被成候共、御奉
公之内急度御請合可申候、為後日之御乳ふくも奉公人
請狀一札、仍而如件、

享和元年

西三月廿一日

親

清七

宗蓮寺屋鋪

請人 檜皮屋 嘉七[㊤]

法つい寺屋鋪

同 たんばや五兵衛[㊤]

奉公人 よ し

笹屋卯兵衛殿

八

奉公人伊太郎不将ニ付親伊八再奉公

請狀一札(D 21)

一札之事

一此伊太郎と申者、先達而も其元殿江年奉公ニ差出し
相動居申候内、心得違ニ而甚不埒之勤方仕、其上当亥
三月ニ理不尽之御暇乞他国江参り、甚難儀仕候故、是
迄之御恩之程存知、此度帰参致度儀、我等方^{伊ハノ印アリ}身命ヲ
投打相願候故、段々異見仕、相札申候而帰参之儀御願
ひ申上、御聞届被成下様、両親請人共御託申上候處、
早速御聞届ケ被遊被下、難有奉存候、其上御了簡御附
被下、是迄之請狀之表通り相動候義被仰下、本人者不
申及、我々共一統難有奉存候、此以後伊太郎儀聊之不
埒之義御座候共、請狀之通り如何様共御存分ニ被成可
被下候、其時一言之異儀申間鋪候、為後日之一札、仍
而如件、

享和三年亥九月

北野大將軍 伏見屋

当証人 甚吉[㊤]

中猪熊町

親 伊八[㊤]

同 いさ

先請人
井筒屋淨見相果候ニ付

大黒屋

井筒屋

仁兵衛殿

代り 利兵衛[㊦]
本人 伊太郎

九 善介、女中ノ件ニ付樽料請狀一札(D 22)

一札

一其御元方おへん殿義、幸在町八幡屋嘉兵衛殿へ年季奉公被相勤之内、我々相對ニ而年間キニ此方迎向候義申置候得共、此度田舎親元江御戻し被成、京都住イ被致不申候由被仰聞承知仕候、依之おへん殿義ニ付何之申分も無御座候、尤為御挨拶御樽料金子貳百足被下遣ニ請取申候、勿論此後おへん殿京住致され不申上ハ、其元殿へ掛リケ間敷義一切申間敷候、為其一札、仍而如件、

文化二年乙丑五月十日

笹屋卯兵衛殿

上立売通芝薬師町
若狭屋利兵衛
弟子 善介[㊦]

一〇 伊太郎不奉公ニ付請人等請狀一札(D 23)

一札

一其元殿江年季奉公ニ遣置候伊太郎義、此度不埒致御了簡も難被成候故、本人伊太郎不調法之筋を悔帰參御頼呉候様申之、私共段々御託申上、来ル寅九月迄急度相改御奉公相勤させ可申段御願申上候処、御聞届被成被下、本人者勿論私共迄も難有奉存候、尤先達而別段借り請申候金子壹両、御相對之通実跡ニ相勤候ハ、御済被下候、是又重々難有仕合存候、若相勤候内ニ不奉公致候ハ、右金子壹両調達致、織職御差留被成候共、^(伊ハ、藤七、久兵衛ノ印アリ)本人并ニ私共迄急度承知仕、其時一言子細申間敷候、為後証一札如件、

文化式年

乙丑十二月

井筒屋おふさ殿

本人 伊太郎(爪印)
北野境内紙屋川町
請人 伏見屋 藤七[㊦]
西陣寺之内西半町
同 大黒屋 久兵衛[㊦]
同中猪熊町
親 平野屋 伊八[㊦]

一一 銅屋庄助等、奉公人つや請状 (D 24)

奉公人請状事

一 此つやと申仁当五月(金七ノ印アリ)来ル丑五月迄九年拾年之間、貴

殿方江年季奉公ニ進シ申所実正也、然ル所我等金子入用之儀ニ付、此縁を以テ金子毫兩借用仕、只今慥受取申候、此者我等能存慥成仁ニ而御座候故請人ニ罷立申候、年季之内不奉公仕候歟、又者取逃欠落其外如何様之悪事出来仕候共、我等罷出右之金子者無相違相立、急度其埒明、其殿方江少も御損御難申間敷候、為後日之奉公人請状、仍而如件、

文化四年丁卯五月

請人 銅屋庄助

親 八文字屋金七

笹屋お寮殿

奉公主 つや

一二 奉公人庄七詫状一札 (D 31)

一札之事

一 此度私共不調法之儀在之、宿元江御預ケ被下候段奉恐

入候、然處偏ニ御訖申入、帰参之義御願申上候処、御聞届被成下難有仕合奉存候、此上者御奉公一切ニ仕、御家之掟メ相守、万事大切ニ相勸可申候、勿論身分之慎第一ニ可仕候、依而御佗一札如件、

文化七年 奉公人 庄七

午三月 兄 太平次

御主人様

参

一三 帶屋与三兵衛等、利兵衛不奉公ニ付

詫状一札 (D 39)

一札

一 我等悴利兵衛義、先達而不奉公仕、御暇被下恐入罷在候處、此度立鞍屋源兵衛殿御帰参之儀、段々御頼被下、別而利兵衛傍輩庄七殿義も御願申被呉、以御了簡御帰参仕、相勸申候様仰被聞、本人勿論我等迄重々難有奉

存候、此後別紙御定書之通り急度被相守可申候、尤勤

(与三兵衛、清兵衛ノ印アリ)

中不埒之義仕候ハ、我等連名之者罷出急度埒明ケ可申候、其上御暇被下候共、一言子細申間敷候、為後証如件、

文化十三年

子閏八月

親 帶屋与三兵衛㊤

一条通七本松東江入町

請人 柳屋 清兵衛㊤

奉公人 利兵衛㊤

源助(爪印)

笹屋卯兵衛殿

一四 奉公人源助誓紙(D 40)

心得之㊤

一正直第一之㊤

并家内氣ヲ付相働事

一商売出情第一之㊤

代品物大切ニ致、我持用致間敷事

一喜六江舩シ我意ヲ致ス㊤

并ニ傍輩六ツ間敷身育之㊤

一日々勤大切ニ致出入行受致㊤

夜分出ル㊤無用、身ノ廻リ悪敷

風儀アル習不申、商人風を致事、

尤商売用ニハ身廻リ不構、油断無勤ル事

一不儀ケ間敷儀一切無用事

一酒好物ニ候ハ、我身ヲ思ひ心ニテ計可申事

并ニ友達附合事

右之通急度相守可申候、以上、

文化十三年

子九月

利兵衛㊤

源 助㊤

一五 山形屋九兵衛等、奉公人忠七不奉公ニ付

詫状一札(D 42)

一 札

一我等忤忠七義、其元殿別家卯作殿方ニ而幼少ハ御奉公相勤来候處、去子ノ五月不奉公仕御暇被下候處、其元殿預御取成ニ帰参仕、当春迄御奉公相勤居候處、又

候此度貴殿御店ニ而自前商内為致被下成、尤金銀之御世話迄成被下候段千万忝奉存候、尤半季中利分高半分ハ卯作殿へ是迄引負等仕、又ハ得意先等御預ケ被下、方々為冥加と相渡シ、(近江屋伊兵衛ノ印アリ)残半分忠七宿這入望性と御定被成被下、重々難有奉存候、尤此後身持ハ勿論、金銀出入又ハ取逃欠落仕候哉、一切何支ニ不寄故障ケ間敷義出来候得へ、何時ニ而も我等と請人早速罷出、急度埒明ケ可申候、為後証之、仍而一札如件、

文化十五年

寅正月十日

上立荒浄ふく寺西入丁
親 山形屋九兵衛㊟

安居院廬山寺上ル中丁

請人 近江屋伊兵衛㊟

本人 忠 七(爪印)

笹屋卯兵衛殿

心得之事

(D 144)

一 商舩相励ミ無如才相勤可申事、
一万支以美意ヲ正路ニ可致事、
(忠七ノ印アリ)

一 不実不儀ケ間敷儀相嗜、店手代子者ニ至迄氣ヲ附相育可申事、

右ケ条之趣、無違背相守、急度相勤可申候間、向後御両所より御覧可被下候、以上、

寅三月

篠屋 喜 六殿

山形屋 忠 七㊟
妻しな(爪印)

同 弥兵衛殿

一六 山形屋九兵衛、忤忠七請狀一札写(D 44)

覚

一金五両也 内壺両卯作様分

右者、此度忤忠七義 宿這入致度様申候付、右金子望性として被置下、千万難有奉存候、為其請取一札如件、

文政三年

辰八月四日

山形屋九兵衛

忤 忠 七

笹屋卯兵衛殿

一七 奉公人甚助等、不埒引負銀子請合一札

(D 45)

一札

一銀百九拾壹匁七分貳厘

一同百三拾五匁

一同六拾四匁九分

一同五拾九匁七分

一金子壹兩也

右之銀子、私此度大不埒仕候ニ付宿元へ御預ケ被成、御暇被下候様被仰聞奉恐入候、然ル處、母、伯母兩人段と御願申上吳、以御憐愍帰参仕候様難有奉存候、則引負之銀子返納可仕筈候處、無其儀罷在候、是又以格別之思召、此以後勤方商売向ハ不及申候、万端何事ニ不寄、仮相背不申、急度日と出情仕相励候、勤方ヲ御覽被成下被下、其上ニ而追々御了簡之御勘弁被成下候様奉承知難有奉存候、万一此後不埒之義仕候得ハ、私ハ勿論兩人之者共如何様之思召ニ被成候共、其時一言子細申間敷候、依而請

合一札如斯ニ御座候、以上、

文政四年巳正月

奉公人 甚助

母 の ふ ㊦

伯母 ち よ ㊦

御主人様

一八 別家元七銀子借用一札 (D 51)

一札

一右銀高七朱ニ而借リ受候躰ニ仕、半季ニ利足相計リ御預ケ申、臨時入用其外道具類相調候、用意銀ニ可仕段、猶当座借リ銀子ハ六朱、凡五十兩前後ハ借用被仰付候段、委細承知仕候、急度相守可申候、以上、
(元七ノ印アリ)

文政十二年丑四月

兄御主人

本家卯兵衛殿

同弟別家
元 七 ㊦

注 傍線ノ「五十」ハ符牒デ記入シテアル。

一九 別家元七銀子預り一札 (D 52)

一 札

一銀五貫目也
(元七ノ印アリ)

右者、此度其御許喜六殿名次相続仕候ニ付、為望性銀ヲ

御渡シ被下候段実正明白也、然ル上ハ二季店卸之砌リ

銀子ニ而勘定立可申願イ、乍併代呂物式三不通リ尽ニ

も相成可申哉、其余相違不仕候様被仰聞、急度承知仕、

追々出情仕可申候、仍而預リ一札如件、
(精)
(元七ノ印アリ)

文政十二年 丑 四月

同弟別家

元 七 ⑩

兄御主人

本家卯兵衛殿

二〇 山形屋忠七金子借用一札 (D 54)

一 札之事

一金三兩也
(忠七ノ印アリ)

右金子、私此度不計大難渋ニ出合、無據借用仕候處実

正明白也、返済之儀者定給銀之内ニ而、半季分ニ金式

歩宛急致差入、無滞皆済可仕候、右之趣相違之義毛頭

無御座候、為後証一札、仍而如件、

文政十三年

山形屋 忠 七 ⑩

寅三月

妻 し な (爪印)

篠屋卯兵衛殿

二一 近江屋弥兵衛、別家相続人元七請合一札 (D 58)

請合一札

一此元七義、其御元別家喜六殿方江去ル丑四月相続人ニ

我等共々進申候處実正也、則元手銀五貫目諸道具共御

渡被下、糸商売仕来候處、暫之間ニ大不動定仕、去ル

卯七月勘定ニ者、元手銀者不及申ニ御取替金百拾八兩
(安兵衛、喜六ノ印アリ)

御借財ニ相成、其外ニも有之、誠ニ申分無之当惑仕候、

右ニ依、糸商売差留、名義御取上之上、既ニ離縁ニも

可被成旨被仰聞、御尤至極ニ存候、早速本人ニ段々為

申聞候處、何分当年中者此尽ニ而名前計御借被下金銀

者不及申ニ一切不寄何々、少シ^茂御無心不申、御借財之元入少々ニ而も差入申度、万端相働申度旨段々我等共御願申スニ付、無^レ抛其元殿へ度々御願申入候処、御了簡難相成候処、御聞入御承知被下、重々忝存候、然ル上者、向後金銀出入者勿論一切故障^ケ間敷儀出来候得へ、早速両人罷出、急度埒明^ケ、毛頭御難掛申間敷候、為後証之請合一札、依而如件、

天保貳年辛卯九月

当地親

菱屋 安兵衛[㊤]

証人

近江屋 弥兵衛[㊤]

本人元七事

笹屋 喜六[㊤]

主人

笹屋 卯兵衛殿

別紙一札

一元七義、喜六殿跡相続糸商売相初候節、仲ヶ間定諸色万端相背不申、売先買口共不筋取引致間敷旨被仰渡、

急度承仕罷在候処、去卯五月上州藤生善藏方ニ而糸直買仕候而、金四拾両計是又借財ニ相成、誠ニ重々申分相立不申、不埒之条仕候、尤當時表立難渋ニ相成不申様精々相對中ニ御座候、此儀万一故障ニ相成候共、我等兩人早速引請、急度埒明^ケ、其元殿へ毛頭御難掛申間敷候、為後証之一札、依而如件、

天保貳卯九月

親

菱屋 安兵衛[㊤]

証人

近江屋 弥兵衛[㊤]

本人

笹屋 喜六[㊤]

笹屋 卯兵衛殿

一札

一此喜六義、昨卯九月^モ御了簡被下、以御蔭商売取続に候、依之此後右昨冬之仕方ニ而商売相続仕度段御頼申上候処、御聞入被下忝存候、乍併万端思召相可不申事

共、一々被仰聞、御尤承知に候、早速本人急度為申聞相守らセ可申、勿論向後金銀ハ不及申ニ、万端不埒之
（三人ノ印アリ）
夏共出来候得ヘ、我等兩人罷出、急度埒明ケ少も御難
掛申間敷候、為後証之、仍而一札如件、

天保三年辰五月

当地親

菱屋 安兵衛④

証人

近江屋弥兵衛④

本人元七事

笹屋 喜 六④

笹屋卯兵衛殿

二二 元七不縁一札 (D) 63)

不縁一札之事

（三人ノ印アリ）

一合金三拾兩也

（三人ノ印アリ）

一合銀三百目也

私儀五ヶ年以前丑年四月亡喜六殿死跡為相続入家仕、則
喜六与改名仕、家業相続罷在候處、追々不勘定而已相続キ、

翌々卯年七月無拋其許様江御難儀等相懸ケ候付、既ニ家号も御取上ケ可被成処、段々御仵申上、漸御得心被成下候付、其節一札等差入置、家業出精仕候得共、兎角不仕合ニ而、前書之通又候不勘定ニ相成、次第ニ他借等茂弥増必至与難洩仕、迺も右体姿ニ而ハ取凌茂難相成、終ニハ其許様之御難儀ニも可相成義ニ付、此度家号御取上ケ被成、不縁之儀被仰聞、御尤承知仕候、尤借財之儀ハ持伝候、諸道具不残売払、夫々借財方江分散仕、不足之分ハ尚又御足シ銀被成下、且又不縁ニ付別段銀子等迄書面之通ニタ口とも御惠贈被成下、重々難有、慥ニ請取申處
（元七ノ印アリ）
実正也、然ル上ハ私身上ニ付而ハ此後如何様之難洩出来仕候共、主從之間柄杯被申立、一錢目茂無心ケ間敷義者一切申間敷、勿論御出入之儀者不及申、笹屋家号等決而相
（元七ノ印アリ）
名乗申間敷候、若相違之義も有之候ハ、如何様共御取計可被成候、為後日不縁一札、依而如件、

天保四巳年十月

喜六事

元 七④

本文之通少も相違無之候、若元七義此後如何様之六ヶ敷

故障等出来致候共、我等方江引取候上へ、其許殿江ハ一

(安兵衛、弥兵衛ノ印アリ)

切御難儀等相懸ケ申間敷、万一本人不筋之儀共申出候敷、

又ハ実家方ノ故障ケ間敷儀申出候共、我等親分之儀ニ付

何方迄も罷出、急度埒明可申候、勿論元七義身上ニ付而ハ、

我々共引受候上ハ、其許殿江ハ決而御難儀等相懸ケ申間

敷候、為後証連印如件、

親分

菱屋 安兵衛[㊤]

証人

近江屋 弥兵衛[㊤]

笹屋卯兵衛殿

二三 山形屋忠七借銀一札(D 70)

一 札

一私義其御許江幼年ノ段々御高恩ニ預リ来候処、去ル丑

年ノ御店ニ而商内仕度存心ニ付御願申候而、明冬迄相

勤居、此度引切ニ而自前商売仕候ニ付、勿論其以前よ

り御恩借銀、尚又引負等も有之、則銀高左之通御座候、

文政三辰七月

一銀六百三匁

卯作殿ノ引切御店ニ而自前商売

仕候節勘定之借銀也、其砌金子

四両別宅之節元手銀と為申請

候、

同
已十月ノ亥七月迄
一銀三百四拾五匁

度々之借銀

天保六未七月
一同八拾五匁六分一り

給銀之借銀

一同壹貫九拾九匁

商内仕得意そん引負、此内一二

軒為シ濟方も有之候、追々御取

右四点也

可被下候、

右之銀子、此度皆済可仕筈之処、速茂相調不申、依右ニ

格別之以思召ヲ御了簡被下、追々相続仕候上、急度返弁

(忠七ノ印アリ)

可仕候、為後証、依如件、

一銀四百三拾目

此度私引切ニ付為元手銀と御渡

シ被下、重々難有受納仕候、

天保七丙申正月

山形屋

忠 七[㊤]

妻 しな(爪印)

旦那様
佐兵衛様

二四 奉公人源助等詔狀一札 (D 71)

一札之事

一我等 俸源助義、 其許殿へ幼年より御奉公仕、段々御養育被成被下、以御蔭成長仕候義を打忘、既ニ廿才ニ而銀壹貫百四拾目計引負仕候、尤御商売向一切患者ニ候歟、段々御帰参之儀御願申候得共、御聞入無之然ル処 度々折入而御願候故御憐愍を以御承知被下、忝相勤候処、又候去申六月廿二才ニ而銀六百目余引負仕、誠ニ存外不埒者ニ而候、勿論先年も少シ茂入金不仕、此度者是非聊ニ而茂立銀仕、御詔可申候処、我等義当時甚難波ニ付少シ茂出来不申候段拟々申分無之、依右永之御暇被下御尤承知仕候、勿論此以後其元殿御商売糸道御差留被成、売先買先御仲ヶ間内江奉公者不及申、立入等迄も一切不仕候様一

々承知仕候、猶又此度格別之御憐愍之以思召を、着類御渡シ被下、重々忝存候、向後右之趣少ニ而茂相背候得者、如何様之御取計被成候共、我等義者不及申ニ、証人之者一言之子細申間敷候、為後証之、依而一札如件、

天保八年

丁酉二月

親 大宮松原下ル三丁目
丹波屋藤四郎 ㊦

新町四条下ル

証人 近江屋喜兵衛 ㊦

間之町魚棚上ル丁

同 丹波屋伊八 ㊦

本人 源助 ㊦

主人

笹屋卯兵衛殿

二五 坂本屋忠兵衛等、奉公人定七不埒ニ付

詔狀一札 (D 72)

一札

板倉屋半左衛門方江尻込候代物代殘滞
一銀貳貫貳百七拾七匁

引負

一同式貫四百八拾九匁五分

同斷

一同三拾九匁六分

同斷

一金匁兩式朱

右者私悻定七与申者、先年ハ其許殿方江奉公ニ差遣置候
 処、是迄度々心得違之儀在之、私并親類共ハも色々異見
 相加へ、既ニ御暇ニも可相成候、段々御頼申上、再勤被
 成下、重々難有仕合奉存候、然候、又候此度不埒之義仕、
 前書坂倉屋半左衛門方江者取引等難相成旨、毎々被仰置
 候処、其儀承知不仕、定七一分之取計ニ而、是迄度々取引
 致、當時書面之通取引殘銀相滞、其上數口引負等仕、誠
 ニ以無申訳次第、重々奉詫候、依之早速私ハ訳立可仕筈
 ニ御座候得共、何分困窮之私ニ而唯今ニ至リ不殘相償候
 義も難出来、甚難渋仕候付、御憐愍之義段々御願申上、
 右坂倉屋半左衛門方取引殘銀之義、此後其許殿御差図次
 第、様々私ハ及引合、何れ共対談相付可申候、且又定七
 引負金銀之儀者、私ハ様々才覚仕、追々ニ差入可申旨御

頼申上候処、御承知被成下、本人定七義者永之御暇被下
 置、其上格別之思召を以是迄之御仕着等不殘被下置、千
 万忝仕合奉存候、然上者、其許殿御商筋取嘯為致候義
 ハ勿論、外之同商売之方江奉公并日雇働等ニも一切差遣
 申間敷候、且又私義老年之儀ニ而何時急死等可仕も難計
 御座候付、右等之節者、私ニ不拘受人之者共ハ右引負之
 義急度訳立仕可申候、若相違之儀御座候ハ、此一札を
 以如何様共御取計可被成候、其時一言之申分毛頭無御座
 候、為後日一札、依而如件、

西洞院下長者町上町

実親 坂本屋忠兵衛㊤

東洞院六角下町

受人 鳥子屋五兵衛㊤

本人 定七

篠屋卯兵衛殿

二六 菅田屋儀兵衛暖簾分ニ付一札(D 76)

一札

一御本家御蔭并ニ私先代勤勞を以、渡世之基相立候處、

不肖之私家督相続仕候段難有仕合奉存候、尤家財難具

ニ至迄、悉皆御本家及び我家先代より相預リ候品ニ

て、私之物にてハ一品も無御座候、然上者太切ニ守護

仕、御条目之通正路儉素堅相守、精々業体相勤、御預

之上ニ附益いたし、御恩報し可申候、万一心得違仕、

御家名相穢し候敷、又ハ不身持ニ而私欲ニ御預之財宝

遣ひ捨候儀等御座候ハ、早速御暖簾御取上、如何様

ニ御執計被成下候共、其節一言之申分無御座候、為後

日差上置一札、仍而如件、

天保十三年

菅田屋儀兵衛⑩

壬寅九月

御本家様

并ニ

御内和御衆中様

二七 奉公人召抱控 (D) 77

(表紙)

「元治元甲子春改

奉公人召抱控

下女共」

(表紙裏)

「先祖出生南山城綴喜郡奥戸村百姓藤七伴、同郡出外

村百姓武兵衛へ七才之砌ニ親類中へ養子ニ参り候

処、右武兵衛方へ男子出生ニ相成候、十一才之時京

都奉公ニ罷出候事、四十三才宿造り被致事、

一母方南山城相楽郡ひし田村百姓権三郎娘ひし、六代

目卯兵衛同家之事、

一奥戸村名字北尾 出垣外村木村 紋所三ツ柏」

(横書)

「実父出生ハ同郡東川原百姓忠兵衛伴 先祖妻江州水

口在市田村市田伊兵衛娘」

(下段書)

「明治元戊辰町内より出生、改之砌左之通申上候、則

明治元、百廿八ヶ年ニ相成候、六代目卯兵衛

南山城ひし田村百姓権三郎、天保七申五月廿八、十一

才上京候事、則二代目卯兵衛妻いし廿一才養子ニ上京

候事、

則三代目卯兵衛妻おちよ出垣外村武兵衛娘十九才、養

子ニ上京候事」

(二丁表)

「

「ます七月十一日

卯兵衛 生

二月拾日

おらく

定

六月三日生(下段書ノ続キナラン)

一先祖の家作法之通、急度相守可申候事、

一忠勤はけみ善キ事者見習、上下主人之悴娘至ル迄、

悪キ事は。○遠慮なく内々申出し、上ヲうやまい、下ヲあわれ

み、家内一統むつ間敷可致事、

一老若不抱、誠有もの、万事奉公太切致者、商売間合

もの、元服早く為致、何事も氣ヲ附、出情共致遣ス

事、」

(二丁裏)

「二一夜がけ伊勢参詣之後、尤小者下女至迄宿用事有之

候共、一宿無用事、

一朝出九ツ時迄内入、昼飯後出、七ツ時ニ内入、若得

意先掛合延引用事も有之候者、其節者主人江断可申

出事、」

(二丁表)

「右之通、銘々急度相守、少々背違無之可致候事、

元治元甲子春改

六代目 卯兵衛

常泰定」

(中略)

(十三丁表)

「上京式番組

長谷川

大宮頭若宮堅町

栢屋卯兵衛

浄土宗知恩院末

悴 巳之助

宗門寺町頭鞍馬口

午之 十三才

上善寺旦那

一男

正月七日生

明治三

(印判)

午二月九日

「第『六』号(在)『ハ日比野氏ノ署ナリ
明治『廿二』年『六』月『八』日
京都始審裁判所
始審裁判所判事『日比野綱雄』関④」

世話人同町 池田屋儀兵衛殿

聞(印) (注) 印ハ「荒木」トアル

明治十四年癸月八日別宅申附者也」

(中略)

(四十二丁裏)

「京都市上京元拾六組中立売通り

黒門東口入役人町式拾貳番

平民

高橋茂七

本人父茂七事、本人入営中ハ南店奥ヲ

貸与シ、世話致シ遣ス、三十七年十月

中旬ヨリ病氣ナシテ同月三十日死亡ス、

幸イ本人内地歸リ居タル節、内ヨリ葬式

出シ、本葬式ハ本人宿坊ニテスル事、

長男 芳太郎 拾貳才

明治拾三年十月

二十一日生

改名 由吉

改名 勇七

明治廿四年四月八日雇入

明治三十三年十二月一日淡路由良入営スル事、

明治三十六年十一月 ヨリ帰店ナシ、三十七年五月

日露戦タメ入営出兵ス、三十八年十一月再帰雇ス、

三十八年十二月主人同道伊勢参宮之事、

明治四十年十月八日別宅申附、

嫁ハ服部寿との娘なを 娶ル事、

大正三年二月一日退引自宅開業ス、

(四十九丁裏)

「京都市西洞院通り御池下ル三宮西洞院町

丹羽善兵衛

大正元年十一月別宅式致ス

大正貳年二月別宅ヲス

元妙蓮寺町へ

油小路下立売下ル

明治十八年十一月一日生

明治三十一年十一月廿八日雇入

大正拾年一月八日退店

自宅ニ開業ス事

世話人 野牧屋ふさ殿

(中略)

(五十一丁裏)

「葛野郡花園村字宇多野

平民 本郷伊之助

長 四男 巳之助

明治廿四年

改名 巳之吉

六月四日生

十一才

四十三年一月改名栄七

明治三十四年四月八日雇入

世話人

大正七年十月別宅申附事

福寿院

元誓願寺知恵院東入ル

(光院)

大正八年拾貳月拾壹日近江坂田郡息長村
字笠浦北川若平三女ふし(廿三才)妻迎
候、大正十三年一月退店開業ス

(中略)

(六十丁裏)

「京都市上長者智恵光院西へ入

町

大工職

横田林之助

大正拾四年二月別宅申附

五男岩三郎

大正拾五年 月 盧山通(寺脱)
浄福寺西入 林 三女

改名 岩吉

いと嫁申受事

當時十一才

明治三十年七月廿八日

元服改名岩七

明治四拾年四月三日雇入

世話人

実兄

横田林三郎

(六十二丁表)

「京都府下葛野郡花園村字御室

植木商

西沢貞治郎

次男

信次郎

改名

信吉

元服改名

信七

明治廿七年七月廿七日

当年十四才

世話人 店ノ弥吉

明治四拾年老年

九月拾七日雇入

(中略)

(六十二丁表)

「京都市上京区広小路河原町西入

古道具商

骨董

堤 市之助

実弟 順之助

大正十一年十月二日別宅申附事
大正十貳年十一月廿日上田嘉吉
氏長女ヲなをヲ妻ニ呉ル事

改名 順 吉 大正十五年一月退店開業ス

元服改名順七

明治廿五年八月十五日生

当年十五才

(六十二丁裏)

「大阪府南河内郡石川村字市菅須賀

農業 野村藤太郎

次男 甚 藏

改名 甚 吉

明治廿九年十二月二日生

元服改名 甚 七

当年十四才

明治四拾貳年四月拾三日雇入

世話人 野村久次郎殿

(中略)

(六十五丁表)

「市内元誓願寺通千本西入鶏肉店

田中松之助

長女 かず

改名 はる

大正元年四月雇入

一条餅屋世話ス

(後略)

二八 奉公人徳本金次郎雇入請狀 (D 78)

(包紙表書)

「金次郎雇入請狀書」

雇入請狀之事

一 此金次郎与申者、徳本万吉悻ニ御座候処、此度其許殿

ニ雇入奉公差進候處実正也、尤先祖ノ淵底能存慥成者

ニ而、御法度之切夏丹、又者武者之御法人御構之者ニ

而も無御座、宗門代々浄土宗、則寺請狀ニ別紙お添申

候、然ル処、雇入奉公中別宅被成下候共、其許方宗門

(之御作法脱カ) 為相守可申候事、

五年間動メニ付手簞司鏡台
針さし祝遣し暇遣ス

一 御上様御法度之儀者不及申、御宗之御作法堅為相守、

御奉公実躰太切為相勤、仮令如何躰之儀有之候共、勝手俣暫時御暇之□請問敷、若又金錢其外品物持出し引負等品替し等有之候節ハ、我等罷出、急度埒明、少シも其許殿ハ御難難相懸ケ申間敷候、為後日請狀、仍而如件、

近江国甲賀郡信樂多羅尾村

金次郎

徳本万吉⑩

明治五年

壬申八月十八日

我等請人ニ相立候ニ付、品替如何躰六ヶ敷儀出来候共本人不抱、急度埒明少も御難難相掛ケ申間敷候、

名親類

奥嶋仲助⑩

請人

平田儀助⑩

西京

上京八区

木村卯兵衛殿

二九 佐藤伊右衛門弟米八雇入証 (D 79)

雇入証之事

上京区第廿七区

東堀川御池上ル押堀町

佐藤伊右衛門弟

雇入

米 八 ⑩

右其元殿方江從当十月七ヶ年間、家業召仕ひ雇入之義御願申上候処、則御雇入被成下、難有奉存候、然而ハ右同人右年限中其元殿御家風通御召抱可被下候事、

一同人義取逃欠落等仕候ハ、我等方江速々右金高引請、急度弁金可仕事、

一同人義雇入賃之義、御家風御定之通御取計相成候共、私ニおゐて聊申分無之、尤年限中途で御暇被下義坏与申立、商用御手差支之義決而申上間敷事、

一 本人病氣等之節、何事成共御預り申上、養生太切為致、品替り等有之候ハ、早速御答申上、其元殿御差図ニ随ひ、決而我等俣申上間敷事、

一其元殿方臨時御用立節ハ、昼夜ニ不限、早速欠付、太切ニ御用承可申候、此外何事ニ不寄、其元殿より御沙汰之義一切違背申間敷候、為後日雇入証書如件、

明治七年十月

兄親 佐藤伊右衛門[㊤]

雇入 米 八[㊤]

上京第八区北之御門町

木村卯兵衛殿

注 コノ書面ハ「無印紙証書用紙 京都府管下」ノ印刷アル野紙ニ記サレタルモノニテ、綴ジノ箇所ニ、佐藤伊右衛門、米八兩人ノ印アリ。

三〇 出嶋定吉出稼寄留届(D 83)

第五号 出稼券

京都府平民

山城国綴喜郡三組飯岡村

七百三十番
農

出嶋庄五郎

慶応二寅十二月七日生

三男 定吉

右之者、其御地五百七拾壹番屋敷木村卯兵衛方ニ、本月より明治十三年十二月迄稼寄留致シ度旨申出候ニ付、右寄留中御地規則之通御取計、此旨通知有之度候也、

明治十二年三月

戸長

出嶋吉右衛門[㊤]

上京区八組北之御門町

戸長御中

三一 長谷川巳之助別家御報約証書(D 84)

御報約証書

一私義若年 ヨリ御雇入、御召遣被成下、不都なから今日迄相勤、期年満チ候ニ就而ハ、此度別家を相構ヘ候様被仰付、難有仕合ニ奉存候、然ル上ハ尤貴家之御成規ハ勿論、何事ニ不拘、思召ニ随ヒ、尚も注意仕、不都無之様御用相勤、永々御報恩可仕、万一、不都合之義有之候節ハ、如何之御取計被成下候共、決而異義申間敷、右永年御恩忘却無之為メ、御報約証書連署を奉差上候、以上、

明治十四年一月

上京区第壹組堅若宮町

本人 長谷川巳之助 ㊤
実父 長谷川卯兵衛 ㊤
証人 西村 義八 ㊤
同区同町

御主家 木邨卯兵衛様

三二 舞鶴正七暖簾分賜物受領目録 (D 90)

目録

一暖簾 壳張

一家代料 整理公債額面 五百円也

一六枚折屏風 壳雙

一掛額 壳面

一掛物 壳幅

以上

明治三十四年十一月十二日

旧十月二日吉辰

舞鶴正七

本家

木村卯兵衛殿

三三 舞鶴正七誓紙一札 (D 91)

一

不肖正七

幼少之頃ヨリ以テ御高庇ヲ永年勤務仕居候處、今回舞鶴家相統仕、別紙目録之通、分家暖簾家代料外数点御惠賜被下成、御厚志之程辱ク寿納仕、此高恩決シテ忘却致シ間敷、本分ヲ尽スハ勿論、永ク本家之榮福ヲ祈リ、忠勤以テ事ニ任ジ、家名ヲ穢サバラン事、茲ニ堅ク相誓ヒ候者也、

謹白

明治三十四年十一月十二日

旧十月二日吉辰

舞鶴正七

本家

木村卯兵衛殿

三四 舞鶴正七退店營業賜金受書 (D 92)

御受書

一金伍百円也

右ハ私儀分家別宅以來滿五ヶ年余通勤々務致シ居候處、
今回退引自宅ニ於テ營業開始仕候儀ニ附キ、特ニ資本金
トシテ御与へ被下、難有正ニ拝受仕候、就テハ今後扈層
勉勵仕、

本家大切忠勤万事可心懸、依テ御受書如斯御座候也、

明治参拾有九念

第八月二日

舞鶴正七

本家七代目

卯兵衛様

三五 別家酒井長四郎整理公債受領証(D 96)

証

一 整理公債額面

伍百円也

右御先主六代目

常泰様御死亡後、永年之主恩ヲ報セシが為、凡不肖私
義、凡老年大任ヲ受ケ御家法ニ基キ、明治十七年方六
月、本年迄御家政乃^(及)ビ營業上之關係罷有ニ附、其賞之

為前書之通り公債証御下与ニ被下、難有頂戴御厚意之
段奉鳴謝候、今回御相談人御親族御決定、既ニ御入
家相成候得共、猶此上無私公平忠勤勉仕可事、御為筋
之義者亡却不仕候、依而御受証如件、
⁽⁵⁾

明治廿九年

別家

丙申十一月六日

酒井長四郎 印

七十才

本家様

三六 高橋勇七退店開業ニ付賜金受取目録

(D 98)

目録

配當賞与

積立金

特別賞与

慰勞金

一金七百八拾九円七拾五錢也
一金參百円也

右ハ今回退店開商ヲ許サレ候ニ付テハ、目録之通り御
与へ被下有難ク正ニ頂戴仕^(戴)り候也、

今度自宅開商ヲ差許サレ候ニ付テハ、以後一切本家ノ
商業上ニ御差支へ之有等ノ所為誓テ致サズ、一意専心

奮勵致ス可ク候ニ付、幾久敷御援助御引立ノ程御願上

候、

大正三年二月二日

高橋勇七

本家七代目

御主人様

三八 七代目木村卯兵衛資本金預り証(D 100)

証

一金參百円也 資本金

右之金額正ニ預リ置候也、

大正七年式月八日

本家主入印

一宮義七江

三七 一宮義七暖簾分賜物請証(D 99)

請証

一白張暖簾

芗張

一資本金

金參百円

一道具料

金芗百円

一紹紋付羽織

芗着

右之品々、今回別家仰付けられ候徴として、御恵与被

成下難有拝受仕候也、

大正七年式月八日

一宮義七

七代目

御本家御主人様

三九 一宮義七暖簾分誓証(D 101)

誓証

不肖 在勤中ハ微功とても縁すべきもの一も御座なく、

剩ヘ一方ならぬ御厄介相掛候にも不拘、任滿て今回名誓

ある別家の班に加へられ難有奉存候、其上は御本家の御

掟を生々世々固く遵守可仕誓ひ申候也、

大正七年式月八日

一宮義七印

七代目

御本家御主人様

四〇 本家木村卯兵衛暖簾分賜物目録 (D 102)

目録

一 白張暖簾 壹張

一 資本金 金參百円也

一 道具料 金壹百円也

一 紹紋附羽織 壹枚

右ハ今回別宅申附候ニ附相与候也、

大正七年

第貳月八日

一宮義七江

本家七代目

主人 印

四一 一宮義七入婿ニ付答辞 (D 103)

答 辞

去ル明治三十六年四月以来、拾有五年ノ久シキ商業見習奉公勤務中ハ何等可成ナク、且ツ一方ナラヌ御迷惑相掛候ニモ拘ハラズ、別家ノ班ニ加ヘラレシサヘアルニ、剩ヘ御親族ナル川村様方ヘ養子入婿ヲ仰付ラレ、無上栄誉

ニ奉存候、此ノ上ハ身不肖ナレドモ人生ヲ全カラシメン為メ、今日迄授ケラレシ脩養ノ活用ニ全力ヲ尽スベク誓テ御答申上候也、

大正七年五月

一宮義七

七代目

御主人様

四二 一宮義七入婿祝儀受納書 (D 104)

御主人様ヨリ

一 拵 料 金壹百円

おちゑ様ヨリ

一手簞笥 壹 個

右ハ別紙今回ノ挙ニ就キ祝儀トシテ御贈与被成下難有拝受仕候也、

大正七年五月

一宮義七

七代目

御主人様

四三 本郷栄七別家ニ付誓紙 (D 105)

回顧スレバ、今ヲ去十八年前未ダ東西ヲモ弁ヘザル頃ヨリ現時ニ至ル永年問、日夜御教育被下候御高恩ハ山海ノ高深ニモ比シ難ク、父母モヨク及バザル處ト奉感謝候、尚微力薄識、其間何等ノ功無之ニモ不拘、今回別家被仰付、且結構ナル品々御惠贈ニ預リ、身ニ余ル光榮ニ奉存候、然ル上ハ一意専心本家ノ家憲ヲ守リ、一層勉勵別家タル地位ヲ相保チ御家名ヲ汚スガ如キ行為ハ決シテ不仕候条、何卒乍此上倍層ノ御教指ニ預リ度誓書、依テ如件、以上、

大正七年十月二日

本郷栄七^⑩

本家七代目

御主人様

四四 西沢信七別家ニ付誓書(D) 112

十四歳ノ幼少ヨリ主従ノ契リヲ結ビ、其当時ハ何レノ東西ヲモ弁ゼズ、コトニ愚底ナル者ヲ十六年ノ長キ月日、親ニモ受ガタキ大恩ヲ蒙リシニ、其間何ノ功蹟モ無キ不^(續)

束者ニ不抱、御思召ヲ以テ大正拾壹年貳月貳日付ヲ以テ別家ヲ許サレ、尚又、住宅払底ノ折柄、多大ノ御配慮ニ預リ、特ニ元誓願寺通大宮西入御持家ヲ御アテガイ下サレ、愈大正拾壹年四月拾貳日依リ起床出来得ル御本家ノ御心ヅクシ難有、此喜ハタトヘ様モ無ク、終生忘間敷候、母ハ固ヨリ兄弟共ニ只感涙致居候、入宅当日モ私儀神祭ノサイ、母本家御礼帰リニ立寄ラレ、氣モ狂ハンバカリ喜バレ、其上父ガ生居ラレ候ヘバ、サゾ喜バレル事トテ涙ニムセビ、今後一ソー御本家大切ニナシ行用トテ帰リ申候、此上ハ及ス乍、御輔導ニ預ルト共ニ、御則ニソムカズ、マジメニ一層勉勵シ、別家トシテノ人格ヲタモチ、身命ヲ投ウチテモ、此御高恩ノ万分ノ一ニモ誓テムクユベク候、尚子孫ニ至ルモ、此旨ヲ伝ヘ、永代御本家ノ尊徳ヲ受ケ、共ニ末代迄ノ隆盛ヲ期スル次第ニ御座候、茲ニ謹デ誓文ニ替、書置申候也、

大正拾壹年

四月吉辰

西沢信七

御本家七代目

御主人様

四五 堤順七別宅ニ付誓書(D 113)

御誓書

一拾五才依り御奉公参り、此度式拾九才拾月式日ニテ、御主人様・御知恵様御同情ニ依り、目出度御別宅ノ許ヲ得マシタ私ノ心持ハ、何ト申上ゲマシテ御礼又ハ御恩返シヲセネバ成リマセンカ、其ノ許ヲノ御言ヲ御戴キ致シマシタ事ハ、私幾重ニモ御礼申上候、其ノ永年ノ間ト云物ハ、不都合千万ナ私ヲ、御主人様ナリ御知恵様ノ御同情ニ依リマシタ御蔭ト万々思フテ居リマス次第デ有リマス、去年大正九年變働後、私ノ進退ノ儀ニ附キ、此又御主人様御同情御^(慈悲)示威ニ依り、相変ラズ御奉公ノ榮ヲ戴キマシタ其ノ時ノ私心中如何程デ有リマシタカ、其ノ御恩ハ私死テモ決シテ忘レハ致シマセン、此上ハ御篠屋家并ニ御本家ノ為^(誠)メ精心誠意ヲ以

テ、益々商業ニ勉強シ益々奮闘^(努)勵力依リ外ニ有リマセン、尚此度ハ私ノ家ノ事ニ附、色々と御世話様ニ預リ、私初メ母并ニ兄一同皆親族ニ至ル迄、御主人様・御知恵様ノ御親切ニ涙ヲ流シ悦デ居リマス次第デ有マス、尚此上ハ重ネ^(努)御本家ノ為^(誠)メ精心誠意ヲ以テ、益々奮闘^(努)勵力致シ、右堅ク守マス、尚此上ハ不都合ナ私ヲ末長ク御主人様ノ御力ニ預リ、度重テ御願上奉候也、一別家後、自分独立商業致シ、後日ノ事モ私并ニ妻子孫々ニ至ル迄、御本家様ノ御命令ニ堅ク誓イ守リマス、万一私不幸ニシテ早死ノ節ハ、御本家様万事宜敷御願上奉候也、

一此度ハ御篠屋家御一同様ノ内へ永遠ニ入レテ戴キマシタ私ハ、決シテ御本家并ニ暖簾ニ墨附様ナ不都合千万ナ事ハ申スニ及バズ、如何依ラズ御主人様御本家ノ云附ヲ右堅ク誓イ守候也、

右三ヶ條、堅ク誓言仕候也、

大正拾貳年 壹月八日

堤 順七

御本家七代目御主人様

四六 堤順七退店開業ニ付誓書 (D 124)

御誓書

一 此度御本家ニ通動以來、退店開業ノ御許ニ預リ、万々御礼申上候、尚又御本家ト同商ノ御許ニ相成、幾重ニモ御礼申上候、其ノ上ハ私トシテ取ベキ道ハ、御本家ノ為メ並ニ笹屋家ニ対シ決シテ不面目ナル事、絶対堅ク守リ、益々忠勤勉勵、御本家ノ為又私ノ為家法相続^(マ)ス仕候間御安心相成度候也、

一 尚商業上、決シテ御本家ニ対シ御迷惑^(惑)ノ掛ル様ナル事ハ重々絶対致サズ、右堅ク誓守申候也、

大正拾五年

壹月八日

堤 順七

御本家七代目

御主人様

四七 堤順七配当積立金受取書 (D 126)

御受取書

一金壹千四百七拾壹円八拾貳錢

今回退店自宅開商ニ付、在勤々務中ノ配当積立金、右正ニ領狀仕申候也、

大正拾五年

壹月八日

堤 順七

御本家七代目

御主人様

四八 西脇長七別家ニ付宣誓書 (D 139)

昭和八年十月八日 私儀別家ヲ差許サレ、不肖身ニ取リ生涯ヲ通ジテノ有意義ナ芽出度サ限リナク、感慨無量ナル日デゴザイマス、過去ヲ回顧スレバ、眼病ノ為小学校スラ卒業セズ、生家ヲ離レ厄介ナル不性者私ヲ懇ナル御教諭ニ浴シ、且十四有年ノ星霜ヲ実ニ我子同様ニ御指導下サレマシタ御主人様ノ御厚恩ハ、辞筆ニ譬ナク衷心カ

ラ感銘致シテ居リマス、

謝本日御主人様ヨリ御懇篤ナル御教訓ノ上、別家御許シニ預リ、由緒深キ暖簾ヲ給リマシタ事ハ、不肖私ノ欣幸至極デゴザイマス、此ノ上ハ御本家様ノ家建ヲ遵守致シマシテ、永劫ニ決シテ御本家様ヲ始メ、先輩諸賢ニ対シ不徳義致スマジク誠心誠意努力致スト共ニ、今日ノ欣喜ヲ永久ニ忘レヌヤウ心掛ケル覚悟デゴザイマス、

此ニ感謝ノ意ヲ表スルト共ニ、謹ンデ宣誓ヲ呈上申上マス、

昭和八年十月八日

西協長七

御本家七代目

御主人様

四九 某、願申口上覚下書(D 147)

一私義、従来御出入仕候御蔭ニ而商賈相続仕、難有仕合ニ奉存候、然ル處、多病ニ相成、渡世向も睨ニ相動不申候處、御憐愍厚御取立被成下候ニ付、取続ハ仕候得

共、右病氣内へ困窮仕候ニ付大宮通元誓願寺下ル町笹

屋卯兵衛義ハ、同商賈之ものニ而、是迄商賈向其外ニも世話ニ相成来り候處、病氣も折々差引有之、独身同前之私ニ而名跡相続可仕ものも無御座、先祖より数年(マ)来御出入仕之處、六ヶ敷相成候義も甚以無本意、敷ヶ敷奉存候ニ付、恐入候、御願ニ御座候得共、私義ハ引退キ右卯兵衛義、私同様是迄之通、御出入被成下、御用被仰附候様ニ奉頼上候、何分宜敷御賢察被成下、右御願之通り被仰附被下候ハ、難有可奉存候、以上、

月 日

五〇 木村卯兵衛商店店則(D 177)

商品売買ニ関スル件

一各品共ニ評価ヲ入レタル後、各自売買監督ノ元ニ販売スル事、

一各自責任商額ヲ定メ、必ズ其額以上ニ達スル様ニ(奨)商励致ス事、

一其レ以上ハ他ニ得意先ヲ広ムルハ、各自ニ勝手タル事、

奨励法

一各自責任額ニ達シタル上ハ、歩割ニ依テ一定ノ配当金

ヲ与フ事、奨励金ハ御主人相談ノ上定ムル事、

一奨励金ハ二期ニ於ケル利益欠損ヲ論ゼス与フベキ事、

一責任額ハ一同衆合ノ上、定メテ申出ズベキ事、

一奨励金ハ二期棚卸勘定ニ渡スル事、

一各自商額ハ月々統計ヲ作製シ、主任者へ渡スル事、

一定価以下ニ商ヒタルトキハ、各案分ヲ以テ差引スベキ

事、

棚卸方法

一棚卸方法ハ費用増大ノ部分ヲ大節減ノ方法ヲ講ズル事、

(御主人側ノ不利トナラザル様ニ改正シ、大正元年ヨリ三年

ニ至、御同法ヲ拝見ノ上、費用増大ノ部分ノ節減法ヲ計ル事)

一棚卸ノ上ニテ利益金ノ内ヨリ配当ヲ受クルハ、主任者

ノミニテ、他ノ販売方ニハ関係ナキモノトス、

一勘定ノ上、配当ハ以前ニ做テ行ハレ度キ事、

店員ニシ、左ノ店則ヲ定メ各自ニ責ヲ帶テ改善スル事、

店則

一朝起 六時半

一床付 拾時

(但シ商用ハ御用ニテ是非及バヌ
時ハ上定則成限アラズ)

一朝役 各自持役ハ必ズ行フ事、

一下駄ハ各自必ズ携^(カ)ヘ置ク事、

一平日 各自ハ用事無キ倉庫又ハ二階ニ出入スベカラザ

ル事、

一下行 各自必ズ午後二時迄ニ用事ヲ整ヘ帰店致スル

事、多用ノ場合ニテ帰店時間遅ル、時、必ズ内

番ニ電話ニテ居所ヲ明ニ伝ヘ置ク事、内番ハ各

自下行時行先ヲ必ズ控ヘヲク事、

二帰店後外出ノ場合モ外出先ヲ必ズ内番ニ伝ヘ後外出ス

ベキ事、(右三則ハ得意先便利ヲ計ルヲ旨トス)

三帳簿ハ其日ニ必ズ整理致スル事ニ勤ベキ事、買物ハ内

番ニ伝ヘズシテ買物多調ヘヲ致スル事ベカラズ、必ズ

伝へ置ク事、

店則休日

祭日ハ休商各自随一同ノ倶楽ヲ与フベキ事、
(娯)

一六日ハ食後休ムル事、但シ外出ヲ禁ズ、

前(マ)ヘ半斯(ハ)今回ノ春花行定ムル事、
夏川行

右ノ店則ハ嚴格ニ各自責任ヲ帯ビ、月々店檢ヲ行、改善

ヲ計ル事、若則ノ場合、其レ適當ナル罪ヲ受モノトス、
(反脱カ)

注 ユノ店則ハ「木村卯兵衛商店」ト印刷サレタ便箋ニ記サレテイ
ル。

五一 木村卯兵衛商店店則・店員業務分担

(D)
215

店則

一礼儀 来客及同胞ニ対シ道徳ヲ重ジテ親切ヲ第一ニ心

掛コト、上下階級ヲ強制的ニ明ニ執行スヘシ、

朝夕規則ヲ守リ礼儀ヲ正シク行フベシ、

一風紀 品行ノ矯正ニ努力スヘシ、勝手氣俣ニ店内ニ於

テ飲食ヲ禁ス、所有品ハ各自ニ仕末ヲ嚴ニスル

コト(但不仕末者ハ其レ相当ノ処罰ス)、煽動的言

動ヲ用フベカラズ、店内ニ於テ昼間横臥スベカ

ラズ(但シ夏季ニ店務ニ差ツカヘ無限リ、午後式時

間上級者ハ午睡スルコトヲ寛ニス)、

一質素 各自質素ヲ旨トスベシ、各自所有品ニ対シ、驕

奢華美ニ流サレル様嚴格ニ行フベシ(但シ驕奢

華美ニ流ル、様努メタルモノハ嚴罰ス)、

一經濟 店雜品ハ經濟ヲ旨トシテ出来ル限り儉約スルコ

ト、雜品取扱ヲ粗末ニ渡ラザル様店用スベシ、

店雜品ヲ私用ニ供シタル場合ハ相当ノ処罰ス

(但シ買物係ノ許可ヲ得テ私用スルハ此限リニアラ

ス)、

一心得 夜間外出ヲ禁ズ、但シ外出シアル時ハ店主或ハ

上級者ノ許可ヲ受ケ外出スヘシ、各自拳動ヲ明

ニスルコト、各自用向ハ成ル可ク自ラ弁ズベシ、

各自在所ヲ明記スルコト、町内飲食店ニテ飲食

ヲ禁ズ、通勤者ハ毎朝八時參十分迄ニ出勤スル
 コト、商店ノ隆盛ヲ図ル為、毎月十一、二十一
 ノ兩日店員相談日ニ決ス（但シ休日ニ相当スル場
 合ニ於テハ順延スルコト）、第二日曜日ハ店員ノ
 修身日ト定メ、当日午後七時ヨリ十時迄三時間
 修養会ヲ開会ス、平日ハ成ル可ク午前中ニ商用
 ヲ弁ジ、午後一時迄帰店スルコト（但シ商用ノ都
 合上已ムヲ得ザル時ハコノ限りニアラス）、

一公休日第一、第三日曜日、紀元節、天長節、元旦（三
 日）、神武天皇祭、氏神私祭ハ休商前例通、普
 通祭日ハ修養ノ為内休スルモノトス、
 公休日当直者

常七 芳七 栄七 信七 順七

以上五名交代ニ当ルモノトス（但當直者ハ其後三
 日以内ニ公休スルコトヲ得）、

規定時間

外出 午前八時三十分ヨリ

帰店 午後七時 マデ

（右時間ニ遅刻シタルモノハ公休日一日没収ス）

店員担任業務

常七	売帳整理 総取締	源七	各広部帳合係 広部番帳入帳係 買帳引合係
芳七	諸帳簿取締売帳引合 人事取締	彦吉	商品整理係 機業家通写係
栄七	買帳整理 上級取締	虎吉	出入帳係 内番
信七	番消係買物係 徴罰係	政吉	店内整理係
順七	店内整理取締	直吉	機業家通写係
甚七	各九寸売帳合係 下級取締	春吉	雑役
秀七	売先通締係 南北両倉整理係	新吉	同
孝七	九寸番帳入帳係 買帳通係取締 新倉整頓係	留吉	同

右条々役厳格ニ実行スル事、

注 コノ店則ハ留吉ノ雇入レノ大正九年四月五日ヨリ、留吉ノアト
 ニ雇入レラレル与吉ノ雇入レノ大正十年四月十二日ノ間ニ規定サ
 レタモノト推定サレル。

五二 木村卯兵衛商店店員法則 (D 216)

店員法則

店員ハ共和主義ヲ以テ成立シ、一致協同各員本分ヲ務ムベキ事、

店員ハ凡テ品行方正篤実勉強ヲ以テ旨トシ、決シテ不品行ノ行為アルベカラサルベキ事、

店員ハ新旧或ハ勉不勉ノ功力ニヨリ上下ノ等級ヲ附シ、

其等級ニ応ジ、席次ヲ取極メルベキ事、

店員各上席ヲ敬シ、決シテ其ノ教ニソムクベカラザル事、

上席ハ次席ヲ愛シ、凡テ我威ヲ振ハザルベキ事、

店員各務ヲ重ジ、細事タリ共輕忽ニナサズ、相勵ミ相勉

メ、商法盛大主家長久繁榮ノ基ヲ謀ルヲ以テ目的トスベキ事、

店員平常ノ勤勞ヲ休センガ為メ、每半季一日一度ノ大運動會ヲ催シ、又廿歳以上ノ者ハ、毎月一回ノ休日ヲ赦シ、元服前後ノ者ハ、其勉強ニ応ジ、半日以下ノ休日ヲ赦ス、但シ凡テ日暮迄ニ帰宅シ、商法ノ妨害ニナラザル時ニ限

ルベキ事、

以上ノ外

主命ハ決シテ控ムヲ得ズ、凡テノ命令ニ從ヒ、臨機ノ所為又ハ古事ノ習慣ハ破ル事ヲ得ズ、

五三 木村卯兵衛商店店則 (D 153)

規則

一 資本金額ヲ壹万円ト相定メ、月ニ八朱之利足ヲ元方ヘ計ル事、

一 資本之外ニ貸シ越之金額ニ対シテハ、當時之銀行日歩ヲ以テ計量元方ヘ計ル事、

一 店ヨリ元方ヘ対シテ家業トシテ、毎月金額二十円之割ヲ以テ計ル事、

一 棚卸勘定ハ毎年式ケ度トシテ、此ヲ壹月壹日ト七月壹日ト両度ニ相定ム、

一 毎季計算ニハ書拔代呂物ニ対シ、有高ヨリ五歩ヲ引キ、臨時損害費トシテ五歩ヲ引キ去ル事、

一店員ニ対シ飯台及諸入費トシテ、老^(代)人ニ附キ二十五錢

之割ヲ以テ元方ヘ計ル事、

一店員ニシテ別宅後通勤者ヘハ毎月々給ヲ与ヘル事、

一店員ニシテ未ダ別宅迄之者ヘハ毎月小遣トシテ与ヘル事、^(遵)

一毎季棚卸シ勘定計算ハ、諸入費ヲ引キ去リ、差引テ純

益金高之内ヲ三割ヲ準備積立金トシテ、又二割ヲ店員

老同ヘ配当金トシテ附スル事、猶殘額ハ元方ヘ入レ、

百円以下ヲ繰越シ金ニ致ス事、^(繰)

一店員之配当ハ老等ヨリ五等、甲乙之等及ヲ以テ分チ、^(綴)

其之内ヲ四分之老ヲ賞与金トシテ下与ヘ、其余之殘額

ハ各店員之名儀ニテ、株式会社第一銀行小口当座ヘ老

人老冊之通帳ヲ以テ預ケ、通帳ハ元方ヘ預リ、自分之

自俸ニナラザル者トス、

一店員ニシテ若シ不都合出来キタル時キハ、店員老同之

不任意ト見ナシ、十分償任之有ル者トス、依テ当人弁

濟之自力無キ時キハ、店員老同之配当、銀行之預ケ之

分ヨリ弁濟致スベキ者トス、

一計算勘定配当金之内、老等之甲之割ヲ与ヘル者ハ、主人

又ハ同様之内外之償任之有者外ニハ与ヘル事ヲ得ズ、

一店員ニシテ積年之功ニヨリ別宅致シ、其後通勤々務致

ス者ハ、参ケ年ヲ老期トシテ勤功ニヨリ準備積立之内

ヨリ特別賞与ヲ下与ヘル事、又ハ元方ヨリ下与ヘル事

モ有ルヘシ、

一賞与配当等及割方法々ハ、老等之甲ハ配当金高ノ内五

割トシテ、次ヨリ此ヲ主人割出シヲ見計者トス、

明治三十年六月

注 傍線ノ数字ハ全テ符牒ニテ記入シテアル。

五四 合名会社木村卯兵衛商店内規(D 187)

(表紙)

「合名
会社」 木村卯兵衛商店

内 規

昭和十二年参月「」

店則

一 礼儀 来客及同胞ニ対シ、道德ヲ重ジテ親切ヲ第一ニ

心掛コト、上下階級ヲ強制的ニ明ニ執行スベシ、

朝夕規則ヲ守リ、礼儀ヲ正シク行フベシ、

一 風紀 品行ノ矯正ニ努力スベシ、

勝手気俣ニ店内ニ於テ飲食ヲ禁ス、

所有品ハ各自ニ仕末ヲ厳ニスルコト、

煽動的言動ヲ用フベカラズ、

店内ニ於テ昼間横臥スベカラズ、

但シ夏季店務ニサシツカヘナキ間式時間上級者ハ午睡スル
コトヲ寛ニス

一 質素 各自質素ヲ旨トスベシ、

各自所有品ニ対シ驕奢華美ニ流レサル様嚴格ニ

行フベシ、

一 経済

店雑品ハ経済ヲ旨シテ、出来得ル限り儉約スル

コト、雑品取扱ヲ粗末ニ渡ラザル様店用スベシ、

一 心得

夜間外出ヲ禁ズ、
但シ必要アル時ハ店主或ハ上級者ノ
許可ヲ受ケテ外出スベシ

各自挙動ヲ明ニスルコト、

各自用向ハ成ル可ク自ラ弁ズベシ、

各自在所ヲ明記スルコト、

町内飲食店ニテ飲食ヲ禁ズ、

通勤者ハ毎朝八時参十分迄ニ出勤スルコト、

営業時間ハ冬期午前九時、夏期ハ八時参十分ヨ

リ日没迄トス、但シ商勢ニヨリ變更スベシ、

店員各自定メラレタル職分ハ何事ニヨラズ責任

ヲ以テ行フコト、

休日ノ外出時間ハ上級者ハ午后八時、小役員ハ

午后六時迄ニ必ズ帰店スルコト、

一 右ノ各項ハ各自厳ニ守リ違背セザル事ヲ誓約
ス、

以上

藤木梅七 ㊦

小嶋太七 ㊦

福岡豊七 ㊦

一 店務店員取締	梅七
一 小店員教育係	太七
一 店員衛生係	豊七
一 店内備品係	種七
一 店品包装係	安七

五五 店員某、店主へ上申書 (D 188)

(封書表書印刷)

〔商業興信所日報〕

商業興信所京都支所

店發展起因

- 一 店則を店員に示し、店員の目的を満足せしめる事、
- 一 店員に店則を示せずして務めさす時は、我等の前途は航海に羅針盤なき如くである、
- 一 如何に満足なる店則あるも、正一郎氏と店員の和合なき時は、店則ありてない様な物であると思ふ、
- 一 正一郎氏の外聞又は店員間の風説よろしからず、

一 店の基本たる機業家に対し、仕入方あるも無視し、自分勝手の言動を取るが為、機業家の不平多く店の信用悪し、

一 正一郎氏の言動が当木村商店先輩者を無視するが如き言動あるため、今後正一郎氏の当主となりたる場合は、交際を薄らぐ風説あり、

今後以上の事を改正し、実行せられたる時は、店員は満足し、大いに奮闘し、店の發展に尽すべくであろう、今日迄の店員怠落責任觀念薄き事、共同一致心の欠な事は、以上の如き欠点有無と思ふ、

以上

五六 店員某、店主への上申書 (D 191)

(封書表書印刷)

〔商業興信所日報〕

商業興信所京都支所

○店員の操行悪しき場合は、一々叱責せず、之責任者に

一任されたい、

○夜更けまで急を要せぬ仕事は、成可明日早朝に廻し、就床時間を励行して貰いたい、

○公休日に急を要せぬ荷物を造ったり、客を呼ぶ等は、最も店員の不平を抱くにあると思ひますから成可御注意を願いたい、

○機業家に対する不足の応対は、仕入員に一任して、仕入員は其任を全して貰いたい、

○製品に対する不足は、仕入員に急告し、成可仕入員意(以)外はやかましく言はぬやう御伝へ願いたい、

○新しい得意先と取引し、相当の成績(績)をあげたる場合は、相談の結果、店員特別賞をあたへられたい、

不肖

○御主人に申上可は甚だ無視したる言葉と思はれますが、宜敷御(諒)瞭解を御願申上、幾分にては改革あらん事を御依頼致します、

常に楽しみて一日を面白く奉公するも、又常に楽しみ

ざるも、その裏面には何かの心の慰安、又は心の不平から起点し、従つて店員の奪鬭共同一致和合総てが励行されて善い成績(績)をあげる、又店員の不平は不成績(績)を産むと思はれます、この重要な時機に私は最も改革して戴きたいと思ふ事項は、

○販売店員にして任されたる値段に対し、やむなく安価にて売りし場合は、之皆一人を攻めず、支配人(責)に告し、支配人此任にあたられたい、

(私はこの場合、某氏より四回注意を受け、実に聞苦しく自身の心を改めました)

五七 店員浅吉、店主への上申書 (D) 193

一言述べます、私は何も此の店に取つて不足は有りませ(抹消)んが、何にか(其れは自転車(てんとう車)の足りない事です、其の理由は参台の自転車(てんとう車)ではとも廻り憎(こ)いから恐れ入りますが、もう二台買つて下さい、一人ツツ責任付きで掃除をしますから、足りない時には別家様へ借りに行く

有様ですから、幾等^(マ、)も堪まりません、どうかお願いですが、どうか買つて下さい、私だけではありません、皆の爲めです、不自由でくしかたがありません、私の心から御願ひです、

御主人様

浅吉

五八 店員竹吉、店主への上申書 (D 194)

一 先づ言葉扱^(使)ヲ注意致シマス、

一 余暇ガ有レバ夜学ヘ入レテ上ゲテハ何ウデス (小

ニ限リ)、

一 小店員に限り雜貨類ヲ摘当ニ与ヘテモライ度イト (小

店員ノ批評)、

一 食事、すき焼の時、小職員モ同一ニすき焼出来ル様に

シテ上テ下サイ (小職員ノ批評)、

一 店員一同ノ為、修養ニナル月刊雑誌ヲ取入テモライ度
イ、

先づこれ丈出来レバ輸快^(輸)に働く事が出来ルト思ふ、竹

五九 篠屋卯兵衛、町年寄へ届出一札 (A 12)

一札之事

一 御町内我等所持之家屋鋪土蔵附式ケ所、我等死後、妻
しほへ相譲置候処、此度死去仕候、此後妻并ニ相続人
相調不申内、我等死去仕候得ハ、本家篠家太郎兵衛并
ニ親類菱屋久兵衛^(卯兵衛ノ印アリ)江相讓申、其上御町分万端御憐愍ミ、
以御取計ヲ相続仕候様、偏ニ奉願上候、依而書証置候、
如件、

文政十二年

丑七月

篠屋卯兵衛印

御年寄菱屋武助殿

五人組御町中

六〇 藤屋市兵衛、実娘きく引取一札 (A 16)

一札

一我等実娘きく儀、先達而其許殿別家喜六殿方江縁付為致置候処、其後喜六殿儀病死被致候付、きく義無抛我等方江引取可申處、其許殿御厚情を以、暫之間其俵ニ而御世話被成下、五ヶ年以前丑年四月濃州山県郡加納村作兵衛忤元七と申もの、菱屋安兵衛殿親分ニ相成、亡喜六殿跡相続為致、則元七事喜六与改名仕、きく共睦敷家業相動候得共、兎角不仕合相続キ、年々不勘定ニ相成、借財等弥増、迎も右姿ニ而ハ取続キも難相成、其許殿も御世話難行届候付、此度喜六事元七儀不縁之儀被仰聞、右ニ付きく儀も元七同様不縁之儀被仰聞、持参之荷物不残慥請取申處実正也、且又右之外ニ金沓両沓歩御惠贈被成下、忝奉存候、尤きく身上ニ付而ハ仮令如何様之儀出来致候共、其許殿江ハ一切御難儀等決而相懸ケ申間鋪候、為後証引取申一札、依而如件、

天保四巳年十月

きく実父

菱屋 市兵衛

証人

菱屋 長次郎

篠屋卯兵衛殿

同断

近江屋弥兵衛

六一 本家、酒井長四郎宛感謝状写 (A 58)

本紙之写シ

茲ニ先主六代目

常泰死亡後、明治拾七年六月ヨリ本年迄相続人未定ニ附、其許輔佐之任ニ当リ、家風ヲ相守リ、祖先之旨趣ニ基キ、從來家政及ヒ營業上ニ盡力被致候段、寄特之至リニ附、依テ其實トシテ別紙目錄之通り、公債証書額面伍百円也相与ヘ候、猶此上公平ヲ以テ忠勤勉勵相続肝要之事ニ候也、

明治式拾九年第拾卷月六日

本家

酒井長四郎殿

六二 別家酒井長四郎、本家宛頌徳表 (A 59)

頌德表

茲ニ御本家六代ノ主、御諱常泰様、明治十七年五月俄然御逝去遊ハサレ、御世嗣未定ノ処、御令尊御継承被有為、家訓ヲ体シテ能ク内政ヲ修メ給ヒ、御先祖ノ創業ヲ補翼シテ一ノ瑕瑾モナク、万艱ヲ靡シ、夙ニ御励精今日有ルヲ被成、今ヤ御世嗣定リ、既ニ御入家成ルニ及ビテ、回顧スレハ茲ニ拾有余年之間一日ノ如ク、克ク主務ノ大任ヲ全フ被成給フ、其御功德ヤ鴻大ニシテ、敬服ノ外無ク、不肖之長四郎恐悦ノ至リニ不絶、永ク此ノ御功德ヲ後世ニ伝ヘント欲シ、愚老ヲ省ミスシテ頌德表ヲ草シテ奉ル、併而祝意ヲ表シ簠物ヲ捧呈ス、希クハ御嘉納有ラセ給ハシ事ヲ祈ル、

誠恐謹言

明治廿九年

別家

丙申十一月七日

酒井長四郎[㊦]

七十才

本家六代ノ御主御諱

常泰様御令尊

木村お寿殿

六三 暖簾内定書 (B 3)

糸絹売先

一諸得意衆へ前々古出入有之方江者、^(暖)暖簾内互ニ出入致間鋪候事、

一別宅相成候而、暖簾内出入有之候者、互ニ新季出入堅致間敷候事、

右之条々、此度相改申候、向後急度相守可申事、

宝曆十式年^午正月

得意先

伊豆蔵両家

- 木屋 七兵衛殿
- 升屋 源太郎殿
- 笹屋 左兵衛殿
- 橋屋 善兵衛殿
- 橋屋 又兵衛殿
- 龜屋 七左衛門殿
- 升屋 茂兵衛殿

橘屋 六右衛門 殿

橘屋 七右衛門 殿

丸屋 吉兵衛 殿

升屋 与兵衛 殿

玉屋 七兵衛 殿

夷屋 八郎左衛門 殿

紫屋 武兵衛 殿

三文字屋庄右衛門 殿

丸家 利兵衛

右之名前、此度相改メ商事出入堅可為無用者也、

宝曆十式年 午 正月

六四 木村卯兵衛家由緒書 (A 53)

(表紙)

「明治十一歲寅三月際認改

先祖ヨリ由緒証

」

附証

一普請買得卯七へ遣ス、新造共ハ永代勘定本帳入用金、

夫々取調書置物也、
致

左之通帳面拜見事、

当家先祖代々由緒証

一先祖木邑卯兵衛、南山城綴喜郡奥戸村北尾藤七養父同郡出垣外邑木邑兵四郎男勝次郎拾耄才之砌、大宮通元誓願寺上ル薬師町橋本太郎兵衛方江奉公罷越、改名卯兵衛、則四拾三才秋、当町北之方持家之处別家被致、

于今難在連名と相統致居候、元手銀式貫目道具料五百

(緋)

目申請候也、六拾式才十月二日安永式歲癸巳之歲当リ、

最譽勝誓常念禪定門俗名勝藏在之
二代目申請候後南山城出垣外邑隱居

ス、右先祖父ハ同郡東川原邑松邑忠兵衛次男奥戸江養

子、其次男同国相楽郡ひし田邑一ノ宮權三郎入家致ス、

一妻しげ東江州水口在市田邑市田伊兵衛娘、典譽翠巖妙

紅禪定尼也、

一二代目相統人ニ而上塔之段大黒屋佐兵衛殿男、当家式

十七八才之砌ニ入家、三歳目ニ右北之持家土蔵元手銀

五十八貫目申請相統、先祖小供在之處、早世ニ付、南山城菱田村一宮権三郎娘ヲ綴喜郡出垣外邑木邑兵四郎殿養女致シ、妻ニ上京、是又子供無之候附、三代目相統人ニ出垣外木邑兵四郎事武助娘しう、右しう儀ハ三才之砌ニ大和国田原元邑ヘ養女参居候處、二代目実子無之附、拾九才改京都見物申立、当家ヘ入女致也、三代目申請候處、早世ニ附、又々名前請取、卯作改名ニテ相統之事、

一三代目西江州志賀郡上龍花邑西邑淺左衛門男宗次郎、改名与八、実躰ニ附、当家相統人ニ相成、妻しう聳也、子供式人在之、三十七八才之砌死去、則寛政十三歳酉正月廿七日願嘗常誓事、不止事得後聳至來事、二代目改卯吉、改名四代目申請也、

一四代目卯兵衛由緒、西陣大猪熊町丹波屋庄藏男忠兵衛、店より廿五才之砌、おしう跡聳入家、二代目卯吉元手銀式拾貫目、北之先代特家当家式ケ所讓渡し隱居、文化十二乙亥十一月死去、任嘗行啓常称禪定門、妻いし

寛政六歳^{甲寅}十二月二日死去、揚嘗専念妙称禪定尼也、三代目与八殿改名卯兵衛、女子式人在之、姉みよう儀者、今出川大宮西の町中邑久兵衛殿ヘ嫁ニ遣ス、次女、富小路御池下高橋新六殿ヘ嫁ニ遣ス、高橋早世ニ附帰宅、壱ヶ歳之内死去致ス也、

一山内卯作之儀ハ、明治三歳庚午冬^{乙未}七拾歳以前別宅申附ル、右卯字ハ別之儀ニても無之、卯作ハ四代卯兵衛之伯父ニ附、二代目卯吉老相成事ならハ、歳数宜敷、当家相統致度存候得共、壳躰向少々ならハ、迎も当家相統六ヶ敷故、卯字一字遣し、別家申附候也、永世迄別ニ違之儀は無之、別家同断之事ニ候也、右四代卯兵衛殿格別壳躰はげみ、儉約専一、道具家立一切届もなし、在金沢山出来ニ附、子供三人在之老人召つれ隱居心組存候、元妙蓮寺町地面買取、不残新家造候處、子供三人、妻しう死去致ス、後妻申請、当町中嶋孫兵衛殿実女申請、跡相統、度々心配被致候處、本家ヨリ到來也、文政十二歳丑六月二日、讓嘗抄泰、俗名おしう

之事、天保八年丁酉六月二日死去。○良誉実相常元也、

天保十五甲辰九月廿五日後妻たけ死去。○照誉安室惠穩

禪定尼、在金（符牒）夕仙口上（符牒）而外ニ五百両、則元妙連寺町実

家相続心得在之、当家二ヶ所元妙連寺町式ヶ所共議、

一五代目相続人、下京繩手通三条下大黒屋儀兵衛殿次男

本家へ奉公ニ参居合、則三十式才之時、当家江入家、三

十五才之時、室町御池薄屋甚兵衛長女申請候也、時節

悪敷候ニ附、氣病三歳計病附、子供式人在之処死去、

弘化三歳丙午九月二十五日死去。○暎誉染翁常敏禪定門、

俗名佐兵衛事、式人子供之内、姉せい之儀ハ六代目卯

兵衛妻ト在之、致ス

一六代目卯兵衛之儀ハ、南山城相楽郡ひし田邑一ノ宮権

三郎八男、四代目卯兵衛高野山江参詣之砌ニ立寄被成、

兼而先祖ちすじヲ以、当家相続之約定在之、実は八人

子供内女老入、男子老入上京之処、田舎之方宜申立、

帰宅致候附、七才之砌約定被成、十一才、天保七申之

歳上京、捨松改名重助、廿六才之砌、今出川大宮西ひ

し久、五代目卯兵衛殿死去後、万端世話被致、ひし久

子供老入在之候附、下拙ヲ養子申請、其後当家へ遣ス（マ）

度旨願ニ附、本家相談之上、ひし久殿養子成、当家へ

入家致ス、則妻五代目実子せい、明治三歳庚午十一月

十一日死去、泰誉理教清心禪定尼。○明治五歳二月廿三

日二条御幸町角舞鶴儀兵衛隠居、下岡崎舞鶴伝兵衛殿

娘申請也、

一五代目卯兵衛妻ます次男豊次郎事、卯七召つれ本家ヨ

リ申渡ニ附、元妙連寺町江隠居致候、卯七之儀、商人

向之儀甚不都合、長四郎本家兩人ヲ以、段々商人之儀

相続致候共決而商人望なし、織屋当世致度旨申居候、（渡）

職業都合より栄町江地面新シ買、土蔵新家造遣ス也、

五代目卯兵衛々元手銀殘候分、双方立合取調候処、凡

金上（符牒）タ而計在之、尤借用貸高在代呂物無之、差引右之

通金高ヲ申請候也、夫ニ附、卯七へ何程元手銀渡ス事、

本家ヨリも申渡無之、卯兵衛心さしヲ以、地券新家土

藏共遣ス、金 元手銀遣ス、已来永世子孫至迄決而

当家へ難渋申立間敷書附取置候也、尤職業道具先代持
伝之道具多分遣ス也、

一二代目相統卯吉老之代、別家一条大官西の町田中弥兵衛在之処、四代目卯兵衛時退家致、子供六人在之男五人、女一人、男子此方江九才より世話致、弥太郎申候、十八才之時不埒致候附、親類引取、女兄弟之処、夫々親類取引、當時宿坊ニ福寿院墓所在之、則笹弥之分半季每下宅式錢五リ宛寄進候、

一丹州笹山在谷山邑酒井太兵衛男治助之事、長四郎、安政五午歳別宅申附候事、妻富小路三条下 白兔屋幸助娘也、死去、當時西賀茂ヨリ到来也、

一西江州志賀郡上龍花邑荒堀新郎男新助事、藤兵衛、弘化四歳九月ニ別家申附候也、妻六角通室町東入 藤屋長兵衛娘也、明治拾歳七月死去、子供七人女三人、男四人、当家男式人引取、老人烏丸通榎木町下ル処へ養子遣ス也、

一江州信楽多良尾代官家中岩井与市男与助、改名喜兵衛

明治元辰十一月別宅申附ル、妻伊州上野友村勘十郎娘、明治四歳八月十一日死去、家内之儀上野友邑方引取、其跡家財用は当家預置、宿坊笹喜印在墓所半季毎ニ式錢五厘宛、当家ヨリ之寄進致ス、年忌右預之内金高ヲ以相勤遣ス也、此人は永世迄、当家ニ相続人見立遣スもの也、

一洛北二之瀬邑藤左衛門男清助、已前の清助之事ハ上京興教寺前近江屋清兵衛男、小供内ヨリ当家へ奉公人参居候処、廿三才之砌ニ少々不埒在之、出入差止メ宅候処、段々願ニ附差免也、三十七才之砌死去之砌跡相続人子供式人在之故願ニ附、早々当家之店居候清助遣ス、夫故別家並致ス、岡本清助在之、則此人之事也、

右五軒、六代目卯兵衛相統之内別家、笹屋号遣ス処、明治三歳庚午一月、御一新ニ附、屋号御止メニ相成、名字持居、其砌ニ色々談合致候共、糸屋町一統ハ是迄屋号之通リ之暖簾ヲ相持度趣願候附、于今夫々屋号印持居候、永世内輪一紬本家江忠儀致旨申談也、当家ニ

成丈ヶ助力遣ス候事、

一明治六二月一日より本家相続人太助、甚た不埒金十兩

(符牒)

分諸方借用計、凡金カ万兩ア万兩元手銀在之、不都合

(符牒)

エ万兩不埒、夫々召抱置奉公人暇遣ス、卯兵衛色々談

合致候共、只もく金エ万兩助力かたく、色々心配致

よふく納り候処、万金思イ難退、笹儀男儀助と申人式

人ニテ丹州表へ糸買參候、式人共笹山在盗人〇たまさ

れ、金四百八拾兩計持參致、式人共ニキツ禰山死去、

誠ニ往古より無之取込御座候也、下宅ヨリ金九百十五

兩、山内卯作ヨリ七百兩、酒井長四郎五百兩、荒堀藤

(付)

兵衛ヨリ百兩、都合金式仙式百十五兩、損分致候処、

本家家立諸道具売拂之砌、おりう殿思召ニテ巷分通渡

相成候也、

一明治七五月三十日、北之方持家ヨリ出火、誠ニ驚入、

全ハ店小之者之内不調法在之、全卯兵衛不都合存居

候、早々新家造、北隣吉中庄太郎持家買取候、南隣三

田邑喜六持家買取候也、栄町卯七所持家宅ヶ所、東隣

二ヶ所、当町式ヶ所、六代目卯兵衛買取致候也、

一明治十一歳一月、上京一条通七本松東入町水越藤助男

喜七別家申附者也、

一今般五重是迄度々申請候、五代目妻

実誉恵光妙相 俗名 ます

清誉任心常泰 六代目卯兵衛

安誉清心妙思 六代目妻ぢう

右之通、当家用緒証置物也、跡相続兼而家法証置故能

々相守、儉約專一、売駄働キ、実子男女在之共、相続

之外、夫々他家へ縁組可致、尤上ヲ好なし、成丈下方

実駄之方へ取組之事、男子奉公遣ス、女子下女並遣イ

見定之上、縁附致ス候事、但し永世迄替リ候事、代々

印置事、

一七代目相続人之儀、卯兵衛兄之権次郎三男之内、式男

捨吉七才之砌申請、十式才五月廿六日ヨリ上京、尤

子供同様致置、此度跡相続人致候也、

明治十一歳三月

六代目卯兵衛[㊦]

常泰

宅地百十七坪六合五夕

百分三 八十四錢七厘

此代価金十八円式十四錢

百分式半 七十錢六厘

一同町 五百七十式番地 東側

南借家

八十八等

宅地五十七坪八夕

百分三 四十一錢老厘

此代価金十三円七十錢也

百分式半 三十四錢三厘

上京区第八組栄町南側

六百六十三番地

九十七等

一 宅地百六坪〇老夕

百分三 四十七錢五厘

此代価金十五円九十錢也

百分式半 三十九錢八厘

同組元妙連寺町南側五百五十五番地

九十等

百分三

宅地九十九坪七合三夕

六十五錢八厘

此代価金廿一円九十四錢

百分式半 五十四錢九厘

明治十三歲七月九日

明治十歲七月、内ノ藤兵衛死去、兒^{女四人}男^{三人}在之候処、女老入、男老入、烏丸通榎木町下ル金森常次郎養子遣ス、長男藤次郎此方ト奉公致、次男藤三郎、藤兵衛親里西江州志賀郡上龍花村荒堀新太郎^江養男不通ニテ遣ス、送籍之儀ハ、上京拾六組鏡石町ヨリ明治十二年一月遣ス、

一 明治十三六月御改正ニ相成、左ニ

上京区八組大宮元誓寺下ル北之御門町東側五百六十八

番地 北借家

八十八等

百分三

四十一錢七厘

宅地五十七坪八合七夕

百分式半

三十四錢七厘

此代価金十三円八十九錢

一同町 五百七拾番地 東側 本宅

八十八等

番号

一第壹七式 金五百円 起業債 壹枚

番号

一第壹七式四 金五百円 同 壹枚

番号

一第四四壹六 金五百円 同 壹枚

番号

一第八〇壹六 金百円 同 壹枚

右今般買入、永世宝土藏納置者也、

一明治十四歳四月十一日○本宅式ヶ所 土藏 式ヶ所 元

妙連寺町建家式ヶ所 土藏式ヶ所○栄町建家式ヶ所

当町北隣壹ヶ所 土藏壹ヶ所○南隣建家壹ヶ所 土藏

壹ヶ所 今般倅角次郎、妻重、我等死後相讓可申候

事、

一倅卯八之儀、当家相統之儀不氣得ニ附、外方へ別ニ商

法致儀申立、色々申聞候共聞入なし、止事不得、先祖

出生綴喜郡興戸村里藤七、相樂郡ひし田村兄権三郎兩

人、段々及行合、角次郎長男之事故跡長願立、相統人

聞濟、尤其由申立、尚戸長願立、双方聞濟之上、相統

人申請候事、

右卯八之儀ハ、藤七、権三郎親類一紙相談之上、ひし

田兄権三郎方へ引取籍之所、差戻し候、已来何事も一

切障無之事、

一南抱屋敷之内、拾式帖新土藏造候処、諸入費合金八百

五拾円見込候処、金九百円除く入用永世宝也、

一明治十四歳六月廿三日、起業公積証、塚本武右衛門殿

中裁ニテ万端引請、元堺県下大和国十市郡俵本町吉川

善八所持、今般申請、七月中旬迄番替約定

第一号

第五式七壹番 金五百円 壹枚

第一号

第五式七式番 金五百円 壹枚

本稿は昭和四七・四八年度の文部省科学研究費総合研究「京都町触の総合的研究」(代表者 秋山國三氏)の研究成果の一部である。